

**"ハンドボールの普及に何が必要か：  
ヤングレフェリープロジェクトと比較スポーツ文化思想を中心に"  
"What is necessary for the diffusion of handball :  
centering on the Young Referee Project and the comparsion of the idea of  
sports culture"**

1K06B602

大阪 恭史

指導教員 主査 志々田文明先生

副査 杉山千鶴先生

## 問題の所在

日本のハンドボール界は2つの問題に直面している。1つは、現在トップレフェリーの数が減っていること、もう1つは判定基準がレフェリー次第で変化することだ。1つめの原因は、日本ハンドボール協会が設けている現行のレフェリー育成制度が上手く機能しておらず、優秀なレフェリーを発掘または育成できていないからである。2つめの原因は、レフェリーと選手の間で判定に対する解釈が異なるため、試合が終わるたびに不満が起きる。私は、日本が抱える以上の問題に対して、競技の本質、レフェリーの存在、スポーツ観について、歴史的、文化的思想を比較し、考察していく。そして、レフェリーの問題を解決するために日本ハンドボール協会が始めた新しい育成制度についても、海外の活動と比較し、今後の活動につながる改善策を見出していく。

## 第一章 ハンドボール

ここでは、ハンドボールの競技特性を歴史的観点と競技規則から考えた。それによると、ハンドボールはドイツで誕生した最もスピーディーな近代スポーツのひとつであり、投げるといった人間の基本的動作から発展し、自時代とともに「走・跳・投」という運動における基本3要素がバランスよく鍛えられ、身体的、技術的、戦術的に高い能力が求められる競技へと発展していったことが分かった。

## 第二章 レフェリー

ハンドボールのレフェリーについて、その役割・倫理・操作の危険性の3点から考えた。アドバンテージルールによって、身体接触から生まれる平等な得点機会、身体に及ぼす危険性から選手を守り、ハンドボールという競技を正しく行わせる役割があり、その運用を誤れば「中東の笛」に見られる権利を使った横暴へと発展する。ハンドボールのレフェリーは操作の危険性を意識し、高い倫理性を常に持つことが求められる。

## 第三章 スポーツの文化的背景

判定基準の違いを、その競技が生まれた文化的背景から考察する。その結果、ヨーロッパのスポーツ文化には歴史的背景から、平等な条件下での自由競争の原理に働き、日本はフェア・プレー精神を武士道的モラルへとすり替え、「武士道」的な正々堂々とした勝負観、名誉観が重視された。国内で直面している問題はこのスポーツ文化の違いによることが分かった。

## 第四章 育成制度

問題を解決するために、ヤングレフェリープロジェクト(以下、YRP)について国内と海外の活動を比較する。その結果、海外は競技に対する理解、支える風土によって良いレフェリーを育つ環境ができている。日本はレフェリーに対する理解がまだ足りておらず、意識と行動が伴

っていないことが、取材を通して把握できた。

## 結論

国内でハンドボールを普及させるためには、現在行われている YRP を日本が抱える問題を考慮し、実技や理論を中心に行ってきた過去の講習から、ハンドボールが持つ競技特性、ルールの特徴、審判の倫理観、スポーツ文化思想、日本が持つ武士道的意識を理解することから始め、レフェリーの存在意義をハンドボールに携わるひとすべてに認識させることが競技力向上の第一歩となる。